

## マルコによる福音書 3 章 20 節～30 節

2015 年 1 月 22 日

古本 靖久

1、聖歌 452 番 「神はわが力 わが高きやぐら」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 66 ページ）

4、テキストの位置

前回 12 人を任命したイエス様の元に、身内の人、そしてエルサレムから律法学者が来たという記事を今回は見ていきます。

さて、マルコ福音書の中には、「サンドウィッチ形式」と呼ば

れるところがあります。今日の箇所を含む 3 章 20 節～35 節もその一つです。21 節 31 節を続けて読んでみましょう。自然に感じませんか。

ガリラヤ宣教①	1:21-3:6	治癒と論争物語
要約的報告	3:7-12	集まってくる群衆
ガリラヤ宣教②	3:13-19	呼び寄せられた 12 人
	3:20-21	イエスを理解できない家族
	3:22-30	イエスを理解できない律法学者
	3:31-35	イエスの母、兄弟とは誰か
	4:1-	たとえで語る

これはもともとの伝承が 3:21,31-35 と 3:22-30 という二つだったからだと考えられているからです。そして 22~30 節が間に挟み込まれる形で、福音書が編集されたのです。

どうしてそのようなことをしたのでしょうか。それはこの形式をとることで、二つの物語の並列関係が強調されるからです。

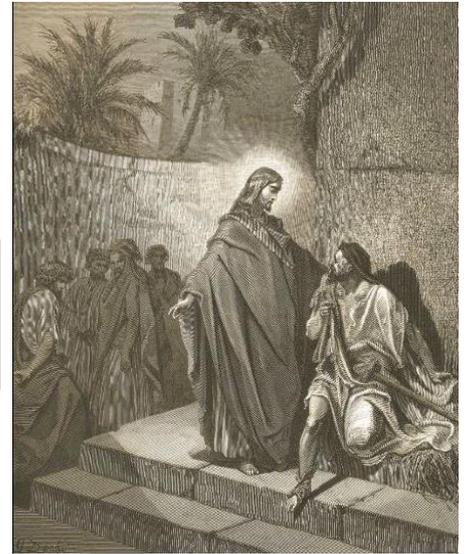
具体的に説明しましょう。まん中の物語に出てくる律法学者は、イエス様に対する無理解によって、イエス様を否定します。その物語を中心に据えることによって、3:20-35 全体のテーマがイエス様に対する無理解であることを、読者に示すのです。

群衆はイエス様の元にやって来ました。そしてイエス様は 12 人を任命しました。そのイエス様のところに次に来たのは、ご自身を受け入れない人々でした。そしてこのテーマの後には、イエス様の新しい家族とは何なのかが語られていくのです。

## 5、節ごとに

### ◆イエスを理解できない家族

**3:20** (そして) イエスが家に帰られる(入る) と、群衆がまた集まって来て、一同(彼ら)は食事をする暇も(パンを食べることもでき) ないほどであった(ある)。



イエス様は 12 人を任命した後、家に入られます。この「家」という単語には定冠詞がついていませんので、特定の家ではなくどこかのある家というニュアンスです。つまりここがどこなのか、カファルナウムなのかどうかということも一切、この文章には書かれていません。

イエス様の周りには、群衆が集まってきます。中風の人をいやす場面でも、湖の岸辺でも、イエス様のもとにはいつも群衆がいました。彼らの多くはいやしを求めて来たのでしょう。イエス様たちは、パンを食べることもできないほど忙しくしていました。イエス様は、それほどまでに群衆に関わっておられたのです。

**3:21** (そして) 身内の人たちはイエスのことを聞いて(彼を) 取り押さえに(捕まえに) 来た。「あの男は気が変になっている」と言われて(言って) いたからである。

「身内の人たち」は 31 節から考えると、イエス様の母と兄弟たちのことだと思われます。彼らはイエス様を捕まえに来ました。この「捕まえる」という語は、ゲツセマネでイエス様が逮捕される時に使われた語と同じです。イエス様の身内は、敵対者たちと全く同じ行動を起こそうとしていたのです。

イエス様の家族が、そんなことをするなんて。そう思うかもしれません。初代教会ですら、イエス様の家族も崇拝の対象となっていきます。そのせいでしょうか。西方の写本の中には、「身内の人たち」が「律法学者ほかの者たち」と書き換えられたものがあります。身内の人のそのような行動は、伝えてはならないと考えた人がいたのかもしれません。

どうして身内の方は、イエス様が、気が変になってしまったと思ったのでしょうか。もしみなさんの親しい人が突然、病気の人をいやし、「神の国は～」と演説し始めたらどうでしょう。親しければ親しいほど、疑ってかかると思います。何か悪いものでも食べたのではないかと考えるかもしれません。わたしの父母もきょうだいも、わたしが牧師になりたいと言いだしたとき、悪霊に取りつかれたとまでは言わないものの、かなり不審感を持っていたことを思い出します。また「気が変になっている」という状態は当時、悪霊に取りつかれていることが原因だと考えられていました。

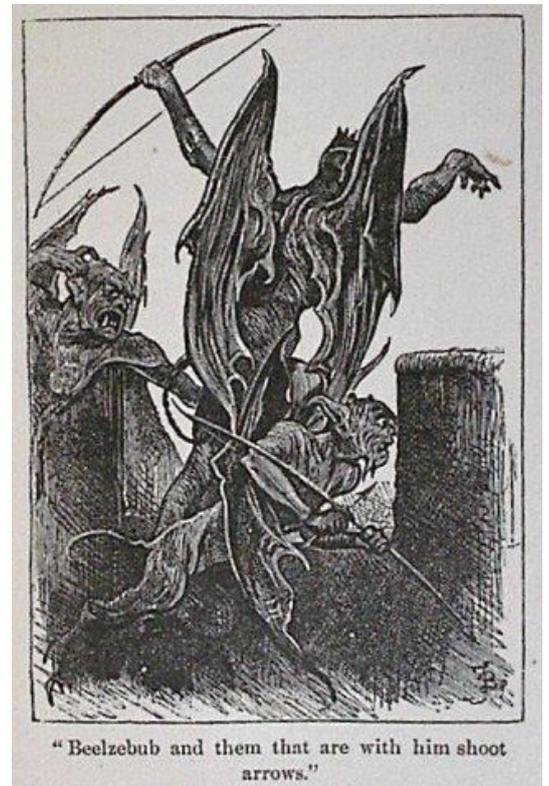
### ◆イエスを理解できない律法学者

3:22 (そして)エルサレムから下って来た律法学者たちも(は)、「あの男はベルゼブルに取りつかれて(を持って)いる」と言い、また、「悪霊(たち)の頭(支配者)の力で悪霊(たち)を追い出している」と言っていた。

エルサレムという地名は前にも出てきました。洗礼者ヨハネのもとに来たとありましたが、3章7節からの「湖の岸辺の群衆」の中にもエルサレムの群衆が含まれています。イエス様がなさったことは、すでにエルサレムまで届いているのです。

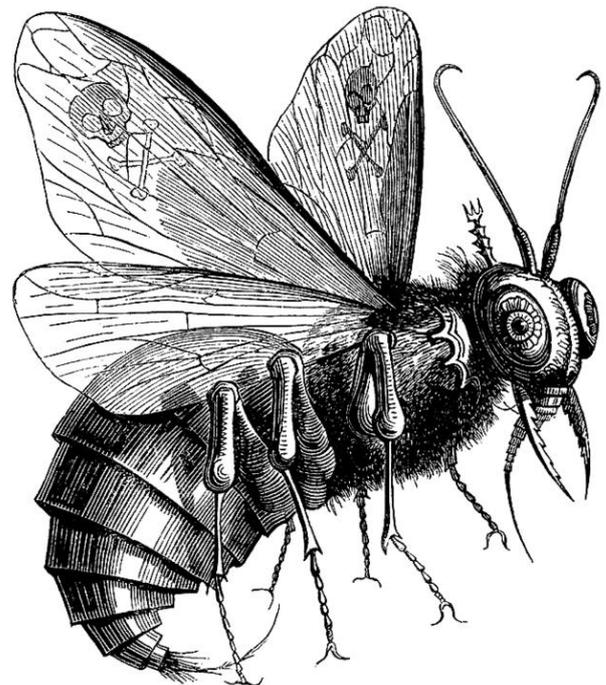
エルサレムには神殿があり、当時の宗教の中心地でした。また新約聖書の中では、エルサレムとはイエス様の受難と復活の地であり、イエス様に敵対する宗教指導者たちの拠点として描かれています。

そのユダヤ教の総本山ともいべき地から律法学者たちがはるばる来たということは、イエス様とエルサレムとの対立がすでに始まっていたことを示します。エルサレムから来た彼らが、ガリラヤでの敵対者とエルサレム当局を結び付けていくのです。



さてここで「ベルゼブル」という言葉が出てきます。北関東教区の広田主教の洗礼名は「ゼルバベル」と紛らわしいのですが、悪霊ではありません。それはともかく、ベルゼブルの意味については諸説あります。一つは「バアルゼブル」というアラム語が語源だというもの。「バアル」は旧約聖書に出てくる異教の神の名で、「主人」や「支配者」という意味があります。そして「ゼブル」は「家」。つまり「家の主人」という意味を持つというものです。

もう一つは「蠅の神(バアルゼブブ)」という意味ではないかという説。今一つピンときませんが、とにかく悪霊のボスと考えられていたようです。



『地獄の辞典』第6版のベルゼブブの挿絵

**3:23** そこで、イエス（彼）は彼らを呼び寄せて、たとえを用いて（彼らに）語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。」

ここでイエス様は律法学者たちを呼び寄せます。イエス様の行動が、ここでは先行します。そして「たとえ」を用いて語られるのです。

「たとえ」とは、ある事柄を説明する時に、もっと身近なものに置き換えて説明することです。しかしこれから読んでいく4章を見ると、わざわざ分かりにくくするために、「たとえ」を用いるということもありました。「たとえ」という語は「謎」という意味も持ちます。イエス様はご自分に対し理解を示さなかった人々に対して、たとえを用いたのです。

マルコ福音書は、イエス様がたとえを用いて語られた場面を重要視します。マタイやルカ、ヨハネ福音書には、イエス様の説教（山上の説教、平地の説教、告別説教など）がありますが、マルコにはそのようなものはなく、たとえを多く用いられるイエス様の姿が見られます。

イエス様の本当の姿はその活動の中では、弟子たちを含むすべての人々に明らかにされていませんでした。イエス様が何者なのかが分かるのは、イエス様の十字架と復活があつてからなのです。イエス様は、たとえを用いて律法学者たちに語ります。それは彼らが理解できないようにと語られたのかもしれませんが。

**3:24-26** （もし）国が内輪で争えば（自らに対して分裂したら）、その国は成り立た（立ち行か）ない。（もし）家が内輪で争えば（自らに対して分裂したら）、その家は成り立た（立ち行か）ない。（そしてもし）同じように、サタンが内輪もめして争えば（自らに対して分裂したら）、立ち行かず、滅びて（終わって）しまう。

ここから、格言的な表現がでてきます。これらは当時のことわざだったのでしょうか。国の内部でクーデターがあつたら、家の中で仲たがいがあつたらどうだろうか。素直に読めば、そのようなことでしょう。

自分がサタンの親玉だったら、サタンを追い出すということはまさしく仲間割れではないのか。イエス様はこのように言われているのですね。

でもわたしがこの場において、このイエス様の言葉を聞いたなら、こう言ったかもしれません。「でも、『この人から出て行け』って悪霊に言ったら、言うこと聞いたじゃないですか。ということは、やっぱりイエス様と悪霊は仲間なんじゃないですか」とか、「今は僕たちを油断させようとしているんでしょう。安心しきってあなたを信じた途端、もっとひどい悪霊にわたしたちを支配させようとしているんじゃないですか」。ひねくれていますよね。

**3:27** また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから（その時にはじめて）、その家を略奪するものだ（できるだろう）。

「イエス様、だから一体何をおっしゃりたいのですか！」。わたしがもし弟子と一緒にいたら、叫んでいたことでしょう。2000年経った後に聖書研究をしている今も、叫んでいるくらいですから。たとえを読むと、このようなことがよくあります。

この箇所について、いろいろな捉え方がありました。イエス様は強い者から略奪される方だというもの。略奪という言葉がきついです。奪い返すというニュアンスでしょうか。神さまから離れ悪魔の支配下にあった人間を、再び取り戻すという意味だとしていました。

また、ベルゼブルの力を借りて悪霊を追い出すということは、強い人と協力して、強い人の家財道具を奪うというくらいナンセンスだと言っている人もいました。さらに、強い者はだれかとか、家財道具は何なのかなど、ここで考える必要はない。イエス様はすべてをわからないように語られているのだから、という解説もありました。

イエス様の言葉をその場で聞いている時は意味が分からないかもしれません。でも十字架と復活を経て、人々はイエス様が自分たちを解放するために来たのだと気づくのです。

**3:28** はっきり（アーメン）、（あなたがたに）言うておく（う）。人の子らが犯す罪（々）やどんな冒瀆の言葉も、すべて赦される。

「はっきり、言うておく」という言い回しが、福音書にはたびたび出てきます。この文を原文で見えていくと、文頭に「アーメン」がついていることに気づきます。

「アーメン」は今も礼拝で使われていて、お祈りの最後に「そうであるように」という信仰と同意を明らかにする言葉です。もともとはユダヤ教の中で使われており、相手の言葉や命令に対し、強い同意や承認を与えるものです。

ところがイエス様は、当時のユダヤ教とは違う用い方をしています。それは相手ではなく自分の言葉に対して用いているということ、そして文頭に「アーメン」を付けていることです。この用い方によって、自分の言葉が真実であること、そしてその言葉は必ずなされるということを強く示すのです。

なお、「人の子ら」は複数形であり、一般的な人間を指しています。また「罪」も複数形ですから、これも一般的な人の罪です。イエス様は、人の罪は何でも赦されるのだということ、アーメンを付けることによって強調し、約束するのです。

**3:29** しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず（赦しを得ることがなく）、永遠に（の）罪の責めを負う（に定められる）。」

ところが赦されない人もいます。それは聖霊を冒瀆する者です。先ほどの節で、あなたたちの罪はすべて赦されるよと言いつつ、それとは対照的に永遠に赦されない人たちもいるというのです。

それでは、聖霊を冒瀆するとはどういうことでしょうか。それは次の節に書いてあります。

**3:30** イエスがこう言われたのは（これは）、「彼は汚れた霊に取りつかれて（を持って）いる」と人々（彼ら）が言っていたからである。

イエス様は「汚れた霊に取りつかれている」と人々から言われました。イエス様が洗礼を受けた時、“霊”が鳩のようにイエス様に降ってきました。そのイエス様に対し、あなたは汚れた霊に取りつかれていると言うことは、聖霊を汚れた霊だとみなしていることなのです。

だから、彼らは聖霊を冒瀆しているのです。イエス様の身内の者が、イエス様のことを「気が変になっている」といって、悪霊に取りつかれていると考えたのも同じことなのです。

#### <今回の箇所から>

イエス様は群衆を憐れみ、いやしの業をおこなってきました。ところが、律法学者や身内の者は、イエス様と敵対していきます。イエス様の行いは、すべての人を幸せにするのではないようです。今でも、人々の人気を集める人が出たら、うらやましいだけでなく、妬みややっかみという気持ちを持ち、足を引っ張ろうとする人たちが出てきます。

イエス様は、社会の隅で相手にされなかった人と共に歩みました。漁師や徴税人を弟子とし、病気の人をいやし、重い皮膚病のため共同体から排除された人々に手を差し伸べました。

イエス様の家族は思ったのかもしれませんが、何故わたしたちではなく、そのような人たちの所へいくのだと。またエルサレムの律法学者たちも考えたでしょう。わたしたちこそ正しい者なのに、わたしたちを差し置いて。

イエス様の一番近くにいると思っていた人たちは、こうして外へと追いやられていくのです。ではわたしたちは、どこに立つのでしょうか。イエス様のそばにいられるのでしょうか。イエス様に関わっている人たちと同じ目線で、イエス様を見えていますか。

今回の学びは、これで終わります。次回は3月26日(木)10時30分からです。「イエスの母、兄弟、「種を蒔く人のたとえ（マルコ3：31～35、4：1～9）」について学んでいきます。